

これまでインフラ及び居住環境など物理的なバリアフリーを紹介してきましたが、最後となる今回は、人の意識の中にあるバリアを検討します。イタリアの事例を参照しつつ、今後のノーマライゼーションの方向性を探ります。

福祉のまちづくり研究会会員 /  
藤女子大学人間生活学部教授

伊藤 春樹

text : Ito Haruki

# 精神的環境のノーマライゼーション

精神的バリアとこれからの社会

世界の遺跡を見ると、それらの素晴らしさに感嘆してしまう。そして、遺跡を造った人々の素晴らしさに感嘆するが、遺跡を創ろうと思った人、

考えた人、発想を持った人の素晴らしさに気づかされることは少ない。しかし、遺跡を創ろうと思った人々

の発想がなかったならば、遺跡がで  
きなかった、遺跡の土台の石一つす  
ら置かれなかったのである。

## ソフトへの視点

私たち、福祉のまちづくり研究会  
はインフラ環境・住居環境のノーマ  
ライゼーションとして研究してき

た。これは高齢者や障害者が積極的に社会参加ができるように、健康者と同じように普通に生活できるようにハード面とソフト面からどのように対処しなければならぬかを議論すると同時に、「普通」とは何かなどを含めて話し合ってきた。ハードの部分では前号までに発表してきたように、それなりの成果が得られたが、ソフトの面では難しい問題が山積みである。この山積みにされた問題は、ハードを解決しようとするたびに浮かび上がってきたものであった。この山積みされている問題に結論を出すまでに至っていないのが現状であるが、まとめてみた。本当はまとめられない問題なのかも知れないが、この途方もない大きな問題に触れようとする私たちの意気込みだけでも少し理解していただければと願うばかりである。

## コミュニケーションとバリア

私たちが生活する中で、ひとつの「バリア・問題」が解決されると新たなものが噴出してくる。まるで新しい「バリア・問題」を作り出すた

めに一つの「バリア・問題」を解決しているようにさえ思える。そして、新たに出てきた「バリア・問題」は、解決したばかりのものよりもはるかに難しいものであるかのようには思える。しかし、この難しい「バリア・問題」に果敢に向かつていかなければ、遺跡を創ろうと発想しなければ遺跡が残らなかつたように、この問題の解決はあり得ない。

ところで、今の日本は次から次へと問題ばかりが噴出しているようでもある。そして、どの問題も解決不可能なように見えるものばかりである。特に今、日本が直面している経済問題は難解である。特に私のような自分の懐すら計算できないものにとつては。

先日、ある経済学者に経済は交換過程であり、交換過程のどこかが切断されたときには、経済は沈滞化すると聞いた。例えば、人が不景気を心配してお金を貯め始めれば、消費が進まず経済の交換過程は切断され沈滞化し、ますます経済は沈滞するといわれている。経済を沈滞化させるわけには行かないと頑張つて一人が消費活動を盛んに行つてもほとんど何の価値もない。その人は経済的に貧しくなつて以前の社会活動がで

きなくなりますます孤立化し、最後には破産するよりほかはない。この交換を活発に行うためには、貯蓄が問題であると今日言われているようでもある。確かに貯蓄は交換過程を切断するもののように見られる。しかし、もつと交換過程を切断するものは不良債権であると私は思う。貯蓄はすぐにでも交換過程に参加できる準備とも考えられるが、不良債権は交換過程の中に参加できない交換過程の障害物そのものである。不良債権買取などは、この不良債権を強引に交換過程に戻そうとして考え出された手段であると考えられる。

この経済学者は経済はコミュニケーションのようなものでもあるといわれた。経済の問題を人間関係における「孤立・孤独」の問題と重ね合わせて捉えると、それなりに理解できる。コミュニケーションの場合にも、お互いに信頼しあつて、意見交換をし合うときにはコミュニケーションが進む。一人の人が話を聞くだけで何も話さずに、聞いているというサインすら出さなかつたとしたら、一人の人が必死に関係を作ろうと話しかけてもコミュニケーションが成り立たないのは経済と同じである。コミュニケーションの場合には、

何らかの形で相互にシグナルが交換されていけば、信頼感も生まれてコミュニケーションが進む可能性があるはずである。コミュニケーションの場合には考え方であつたり、感情であつたり、人格であつたり交換されるものは抽象的なものである。とは言つものの、「言質」を与えたり、取つたりすることもできるので、具体的なものになつてしまつ場合も確かにある。コミュニケーションと同様に経済も交換過程であるとしても、コミュニケーションと根本的に異なるのは、交換するものが意思とか、考え方とか、感情、人格とか言つような抽象的なものではなく、金銭もしくは金銭で等価評価できるものなどの具体的なものの交流・交換であることである。この具体的なものの交換をし合えれば、そこに利益が生まれて、結果として経済は発展する。

## 何がバリアなのか

ところで、少し前には問題にもさなかつたバリアの問題が、建築界においても盛んに論議され、障害者が健常者と同じように一人で出歩け

るように様々な解決策が具現化されてきた。例えば、私たちが扱ってきた問題のように、車椅子での移動のための対策、視覚障害者のための誘導ブロックなど。車椅子での移動のための対策一つとっても傾斜角度の問題、距離の問題、幅の問題など様々で建物との調和や敷地の制限などがこれらに組み合わさって無限に近いほどの問題点が指摘され、解決策が今までに提案されてきた。この

解決策の提案には、様々な人々の間で意見の交換が基礎に行われた。この意見交換は、多くの場合使う側と造る側との間で行われた。そして、この意見交換が上手くいったときには利用できるものができ、そうでなかった場合には利用できないものが造られた。どちらの場合にも、次の新たな問題を提起するものとなった事実だけが残った。この新たな問題提起は、利用する人がさらに容易に利用でき、造る側もより多くの利点があるようにと模索するからでもある。

全ての人が何の障害もなく生活できる社会を創り上げたいという理想のもとに、新しい問題提起がなされるのである。技術革新は私たちの生活を便利にし、生活をしやすくし

た。この生活上の利便さをより多くの人々と分かち合おうとすることは当然のことであるが、この日常生活上での利便さをもたらした道具は、ある意味での多くの不便さも創り出していることに気をつけなければならぬ。

例えば、今日の若者の中では欠くことのできない道具となりつつある携帯電話は、確かに私たちの生活の中に多くの利便さをもたらしたが、何時でも携帯電話に監視されているような感覚やこれを使えない人々を生み出しているという一面をもっている。また、パーソナル・コンピュータを生み出したときも誰でも簡単に使える道具であったと思うが、現実的には多くの高齢者をこの機械に不協応な人々にしてしまった。

どのようなものを作っても、上手に使える人とそうでない人を創ってしまうことを配慮しなければならぬ。だから、利用者に向く使ってもらえるように、新しい使い方を発見してもらえようように協力を願わなければ、どのようなものも新たな障害を生み出すことになる。また、最大の問題は利便なものができればできるほどこの利便さが私たちにとっては当然のこととして考えるように

なり、新たな利便性を求めるという欲望の強さがあることである。たとえば、溺愛されている人の多くが溺愛されていることの幸せだけを感じるのでなく、もっと愛されたいとか、溺愛を邪魔なものだと考えたりするのである。このように、バリアは確かに物理的なものもあるが、自ら創り出すバリアもある。物理的なバリアをなくすことは重要であるが、どんなになくしていても、精神的にバリアを自らの中に創り始めるとバリアは一向に減らなければならず、バリアは誰の協力があっても解決するができないほど大きなものになってしまう。

また、車椅子で移動しなければならぬとき、全ての階段、全てのスロープは大きな障害となる。階段のそばにエレベータができて移動可能になると、エレベータに乗るときにわずかな段差が、車椅子の利用者には大きな障壁となる。彼らにとってこの段差は決してわずかものではない。しかし、二メートルの長い階段から比べれば、一〇センチの段差ははるかに小さな段差で車椅子を利用しなければならぬ人も満足すべきだという感覚は車椅子を強いられない多くの人に生じやすい感覚な

のである。

自分自身が思い込んでバリアにしてしまうものと、他者からバリアだと決め付けられるものもある。バリアの問題は物理的なものと精神的なもの、そしてそれぞれにつき自分が思い込んでしまうバリアと思い込まさせられるものなどがある。

## イタリアの町の中で

ローマの石畳の道を歩いていると、そこには点字ブロックも玄関の入り口も何もない。古代ローマから中世のローマと歴史そのもので成り立っているローマは、遺跡を残すために建物の改造には強い規制がかけられている。このような規制の下に、イタリアの歴史ある町は守られ、イタリア人は中世と同じ景観をできる限り守ろうと努力している。旧市街地への車の乗り入れ制限もその一つと見ることできる。このように歴史の遺産を守ろうとする努力は素晴らしいものがある。

しかし、このために日本で盛んに叫ばれている少なくとも公共的な建物へのバリアフリーは、歴史的遺産

を守るために議論さえなされていないようである。障害をもつ私の友達たちはこれを当たり前のことと考えているようである。「私たち障害をもっているものには不便ではあるが、歴史的遺産を守るために協力しなければならぬと考えている」と彼らはいう。彼らが権利意識とかが希薄だからこのようなことをいうのではなく、自分たちのできる社会貢献のための義務のひとつとして考えているのである。

七〇年代後半にミラノに留学していた日本人医師は「人口に占める障害者の比率は人種とか国民性とかで変わるわけではないのに、町の中で見かける障害者の数が、はるかにここミラノでは多い」と言っていたのを覚えている。階段も多く、点字ブロックもないイタリアでは障害者が外に出回り、それらが整備され始めていた日本では障害者が家に閉じこもる。このような不思議な現実があった。もし、バリアフリー度というような指数があるとするならば、どのような指標を考えなければならぬか、この話の中には重要な指針を含んでいる。今まで書いてきたことであるが、いくら物理的なバリアフリーが完成したとしても、依然として



膨大なバリアが存在しうることを示している。

また、イタリアで白い杖を持った視覚障害者をあまり見かけない。私は視覚障害者の友達たちにこの理由を尋ねたことがある。彼らは「なぜ、自分が視覚障害者であることを見せ

びらかして、生活しなければならぬのか。杖がなくとも助けてもらえば、十分歩ける」と答えた。「白い杖を持っていけば、健常者は気がついて助けやすいのでは」というと、「見ただけであなた方は私たちの必要とすることを理解できるのか。そ

うではないはずだ。必要なとき、私がそれをお願いする。そうでなければ、私たちの必要なことを理解してはいないはずだ」と断言された。さらに、「私たちに白い杖を持たせるのは、健常者の都合を考えてのことではないですか。それと、全ての健常

ローマの街並み

者が何か一つのものを持ってくれれば、私たちは持たなくてもいいではないですか」とまで言われた。健常者が視覚障害者を認識するために「白い杖」が普及したのではないと思うが、社会状況が変化してくると、このように理解されても当然のような状況も作り出してしまうことになる。

## インフラ整備と 助け合い

日本は、車椅子の人もほかの障害者の人も自由に活動できるようにインフラ整備をしている。このインフラ整備は、この整備で障害者が自立して生活できればいいと言いがら、他人を助ける煩わしさを健常者が拒否するという考え方も成り立つ。障害者がインフラ整備だけで生活できるならば、この方策も正しいのかもしれないが、健常者も障害者も支えられて生活しなければ、生きられないのが私たちなのである。私たち日本人は税金を多少大目に払っても障害者と関わりをもちたくないと思っただけなのかもしれない。

イタリアは税金を払うよりも、インフラ整備するよりも、健常者が障

害を持つ人を支援するという考え方もかもしれない。私は、個人的にはイタリア的な考え方が好きであるが、どちらが良いかは個人の選択ではない。

日本では他人に迷惑をかけずに生きることが良いことであると教えられている。他人に迷惑をかけずに自立していることが良いと言われる。確かにそのとおりであるが、迷惑をかけない自立する人ばかりであれば、助け合う必要性は最小限になる。こうして個人は孤立させられなければならなくなる。相互に助け合うことが少なくなればなるほど、助けられたときには迷惑をかけたと感じることが多くなる。こうしてますます助け合いはできなくなってしまう。

しかし、今の日本は仕事が忙しく、他人のことを考えているようにならずかな時間すらないのが現実である。例えば、家族が病気でそこに駆けつけることが容易に許されないような社会かもしれない。私たちは、生産効率を求めてこのような現実社会を創ってしまった。

このように考えてみると、バリアフリーにすることが健常者にも、障害者にも、助けなくても助けられなくてとも考える新たなバリアを創る

ことになってしまふ場合もある。この新たなバリアを軽減するために、互いの意思疎通をすることが大切なのであるが、意思疎通をする共通場面が「迷惑をかけない」ということで少なくなってしまうのである。

日本では言われる前に理解することは美德とされる。一方、はっきりと意思表示することはあまりほめられたことではないと考えられているようであるが、相手に理解されやすいように意思表示するという観点から考えれば、「言われる前に理解する」と同じことである。容易に理解されるように意思表示することと、相手を理解することとはともに同じように重要である。コミュニケーションは相互の意見とか考え方を交換するわけであるが、交換しても相互にその意味と価値が相手にわかりやすいように伝えなければ、意味がない。これが、自分自身が創り出す精神的なバリアと他者から受けるバリアを軽減する唯一の方法なのかもしれない。どんなに説明しても、本当に意味するところは伝えにくいものであることは事実なのであるが、この努力が真のバリアをなくすことになるのかもしれない。

## プロフィール

### 伊藤 春樹(いとう はるき)

上智大学卒業後、イタリア国立ペルージャ大学大学院医学部神経学研究科修了。医学博士。

1988年より現職。

北海道社会福祉協議会『福祉教育専門委員会』副委員長。